

天台山の詩歌（其二） 〱六朝以前（中）

* 薄井俊二

キーワード：天台山、天台集、漢詩、仏教文学、道教文学

はじめに

本稿は、天台山に関わる詩歌について検討を加えることを通して、当時の人々の天台山に対するイメージとその変遷を考察しようとするものである。宋代の李庚等の「天台前集」（「前集」と略）と近人の許尚枢「天台山詩聯選注」（「許本」と略）に掲載されているものを中心に選択していくが、今回は、六朝以前の詩作品十三点を取り上げる。

●凡例

- ・丸数字で、「天台前集」でのタイトルを掲げる。
- ・☆で「前集」や「許本」での収録状況を、★でその他の資料における収録状況を述べる。
- ・以下、■本文と訓訳、■校勘、■語注、■口語訳、■解説、の順で記述する。
- ・本文の底本は「前集」とし、未収のものは適宜指定する。
- ・本節で参照した文献の内、総括的なものとその略称は次の通り。

- 梁昭明太子「文選」…李善注本
- 唐歐陽詢等奉勅撰「芸文類從」百卷（類從）
- 唐徐堅等奉勅撰「初學記」三十卷
- 宋李昉等奉勅撰「文苑英華」一千卷（文苑）
- 宋郭茂倩「樂府詩集」百卷（樂府）
- 明馮惟訥「古詩紀」百五十六卷
- 清嚴可均「全上古三代秦漢三國六朝文」七百四十一卷
- 民国丁福保「全漢三國晉南北朝詩」五十四卷（全漢詩）

近人遼欽立「先秦漢魏晉南北朝詩」（先秦詩）

二 天台山の詩（其二） ～六朝以前（中）

④登天台 葛玄（楊白雲謠）

☆前集拾遺、許本卷一

★全漢詩・先秦詩ともに収録せず。

■本文と訓訳

| | |
|------------------------|------------------------------|
| 高高山上山 | 高高たり山上の山 |
| 山中白雲 <small>閑</small> | 山中 白雲閑 <small>しず</small> かなり |
| 瀑布低頭看 | 瀑布は頭を低 <small>た</small> れて看 |
| 青天舉手 <small>扳</small> | 青天は手を舉げて <small>扳</small> す |
| 石橋橫海外 | 石橋 海外に横たわり |
| 風 <small>笛</small> 落人間 | 風笛 人間に落つ |
| 不見紅塵客 | 紅塵の客を見ず |
| 時時鶴往還 | 時時に鶴の往還するのみ |

■校勘

〈一〉許本作間。 〈二〉許本作攀。 〈三〉許本作雨。

■語注

○高高：高い上にいよいよ高いこと。「詩經・周頌・敬之」に「（天）無日高高在上」とあり、⑥の謝靈運の詩にも「高高入雲霓」とある。○白雲：白い雲は山と道教に関わりが深い。白雲觀という名の道館は多く、

司馬承禎も白雲先生と呼ばれ、彼が都から山に帰る時に朝士が作った送別の詩をまとめたものを「白雲記」といった（『海録碎事』四庫全書類書、東大蔵）。一般名詞と言うより、天台山に関わりが深い言葉と見るべきだろう。○閑：しずか。間も同じ。○低頭：頭を下げる、垂れること。

敬意を示す場合や物思いにふける場合など。ここでは滝の底をのぞき込む様か。いわゆる石梁飛瀑を上から見下ろすことか。○青天：白雲との対比で用いられているのだろう。「莊子・逍遙遊」に「（鵬）絶雲氣、負青天」などとある。○扳：攀に通じる。○石橋：石梁飛瀑の石橋を指すだろう。○風笛：桐柏山を治所とした王子喬が笙を好み、伊洛の間で奏でていたという伝承を受けたものだろう（『天台山記』他）。○紅塵客：紅塵は、車馬が巻き起こす塵埃。転じて、世俗を言う。紅塵客で世俗の人。○鶴往還：これも王子喬が浮丘伯とともに、鶴に乗って昇仙したことをふまえているのだろう。

■口語訳

高いが上に高い、この山の上の山、山中には白雲が閑かに漂う。
深い滝はのぞき込むようにして眺め、青空を手を挙げてよじ登っていく。
不思議な石橋が世界を跨ぐように横たわっており、王子喬の妙なる笙の音が人間世界へも漂ってくる。
ここでは世俗の人の姿は見えず、ただ時折鶴が往還するのを見るばかり。

■解説

脚韻は、平水韻では、山・閑・扳・間・還が「刪平」。攀も「刪

平」。

前集は撰者名の葛玄の下に「楊白雲謠」と注するが、その意味は不詳。白雲謠であれば、「穆天子伝」卷三に、西王母が穆天子に贈ったものとして「西王母爲天子謠曰、白雲在天、山陵自出。道里悠遠、山川間之。將子無死、尚能復來」などとあるが、これとの関係は不明。葛玄の作というが、前集以外には収録されて居らず、仮託であろう。

全体的に整っており、脚韻もきちんと踏んでいる。天台山に関わる名所や王子喬説話などを織り込んでおり、天台山がかなり有名になつて後の作品であることを思わせる。

⑤王子喬讚 陸機

☆許本卷九

★類從卷七十八・陸士衡文集卷九（四部叢刊）・全晋文卷九十八

■本文と訓訳

遺形靈岳 形を靈岳に遺し
顧景忘歸 景を顧みて歸るを忘る
乘雲 倏忽 雲に乗ること倏忽たりて
飄飄紫微 紫微に飄飄たり

■校勘

*類從を底本とする。〈一〉全晋文作倏。

■語注

○遺形：肉体を超脱して、忘我の境地に入ること。賈誼「鵬鳥賦」(「文選」卷十三)に「真人恬漠兮獨與道息、釋智遺形兮超然自喪」とある。

○靈岳：王子喬に関わる、天台山や嵩山を指すだろう。○顧景：顧影とも表記。自らの影(姿)を顧みること。与えられた称号や名譽にふさわ

しくないとして羞じる場合、陥っている苦境に失意を憶える場合、自らの美貌を誇ったり自負したりする場合など、顧みての内容は様々である。ここでは、自らの身の振り方を確かめたということか。○倏忽：倏は倏

の俗字。倏忽で、たちまち、にわか。○飄颻：風の吹く様。転じて、漂う様や高く上がる様をいう。ここでは仙界を自由に遊ぶことだろう。

○紫微：北極星を中心とする天の空域、また天界、仙界。

■口語訳

肉体を地上の靈岳に残し、再び人間界へ戻ってくることはない。

忽ちの内に雲に乗り、仙界を自由に遊んでいる。

■解説

脚韻は、平水韻で、歸・微が、「微平」。韻であるが押韻しているようである。

散文であり、前集未収だが、許本に載せるので収録した。許本は卷九を「桐栢仙都」とし、陸機以下、謝靈運・江淹・梁武帝の王子喬の讚を収録している。

陸機(二六一～三〇三)は、晋の呉郡華亭(江蘇省)の人。字は士衡。晋太康文学の代表者で、詩・賦・文並びに優れていた。「晋書」卷五十四本伝。「隋書経籍志」に「晋平原内史陸機集十四卷」が

あるが、「亡」と注され、既に唐代には散逸していた。宋代に徐民瞻なる人物が十卷本を得て世に出した。その明代の影印本が四部叢刊所収本である。

陸機には、列仙賦など、神仙思想に通じる作品が他にもある。

⑥登臨海嶠初發疆中作與從弟惠連可見羊何共和之(注臨海郡名疆中地名嶠山頂也) 謝靈運

☆前集卷上

★文選卷二十五・三謝詩・古詩紀卷四十八・先秦詩中宋詩卷三

◆題について

◇訓訳

臨海の嶠に登らんとし、初めて疆中を發して作り、從弟の惠連に與へ、羊と何とに見^して共に之に和せしむ。(注、臨海は郡の名、疆中は地名、嶠は山頂なり)

◇語注

○臨海：臨海郡、今の浙江省臨海県辺り。○嶠：高く聳える山。ここでは天台山に隣接する天姥山。○疆中：地名。○惠連：一族の謝惠連。

「文選」にもその作品が収録されている。「宋書」謝靈運伝に「靈運以疾東歸(略)、元嘉五年。靈運既東還、與族弟惠連・東海何長瑜・潁川荀雍・泰山羊璿之、以文章賞會、共爲山擇之游、時人謂之四友」とあり、後出の羊・何とともに、謝靈運とは文人仲間であった。○羊：羊璿之。○何：何長瑜。

■口語訳

臨海郡の高く聳え立つ山に登ろうとし、疆中を出発したところで作り、従弟の恵連に贈った詩で、羊珮之と何長瑜に示して唱和させようとしたもの。

■本文と訓訳

杪秋尋遠山

杪秋に遠き山を尋ねんとす

山遠行不近

山は遠くして行くに近からず

與子別山阿

子と山阿に別れんとし

含酸赴脩(一) 眇(二)

酸を含んで脩眇に赴く

中流袂就判

中流にて袂は判れに就き

欲去情不忍

去らんと欲して情は忍びず

顧望脰未惰

顧りみ望みて脰の未だ惰れずして

汀曲舟已隱

汀の曲に舟は已に隠れぬ

(其一)

隱汀絶望舟

汀に隠れては舟を望むを絶ち

驚棹(三) 逐(四) 驚流

棹を驚せて驚き流れを逐ふ

欲抑一生歡

一生の歡を抑へ

并奔千里游

并せて千里の游に奔らんと欲す

日落當棲薄

日落ちて當に棲薄すべく

繫纜臨江樓

纜を江に臨む樓に繫ぐ

豈惟夕情斂

豈に惟だ 夕情の斂るのみならんや

憶爾共淹留

爾と共に淹留せしを憶ふ

(其二)

淹留昔時歡

淹留せし昔時の歡び

復增今日歡

復た今日の歡きを増す

茲情已分慮

茲の情は已に慮を分け

況乃協悲端

況んや乃ち悲の端に協すをや

秋泉鳴北澗

秋泉は北澗に鳴き

哀猿響南巒

哀猿は南巒に響く

戚戚新別心

戚戚たる新たに別れし心

悽悽久念攢

悽悽として久しき念ひ攢る

(其三)

攢念攻別心

攢れる念ひは別心を攻むるも

旦發青(四) 溪陰

旦に青溪の陰を發す

暝投剡中宿

暝には剡中の宿に投じ

明登天姥岑

明には天姥の岑に登る

高高入雲霓

高高として雲霓に入り

還期那可尋

還期は那ぞ尋ぬべき

儻遇浮丘公

儻し浮丘公に遇はば

長絶子徽音

長く子が徽音を絶たん

(其四)

■校勘

〈一〉李善本文選作軫。 〈二〉詩紀云、一作邇。 〈三〉六臣本文選作驚。

〈四〉六臣注文選作谿、三謝詩同。

■語注

○杪秋：晩秋。「楚辭」九弁（七）に「靚杪秋之遙夜兮」とある。 ○山

阿：山の片隅。 ○含酸：悲しみや辛さを抱く。 ○脩眇：長いあぜ道。

○一生歡：「列子」楊朱篇にある語。この世の楽しみ。ここでは友と過

(其一)

ごす楽しみを指すと解した。広くこの世の楽しみとする解釈もある(五臣注)が、そうであれば、この二句は「この世のあらゆる楽しみを抑えて、あなたと千里の旅をしたい」の意になる。○棲薄：薄は泊。宿泊。○夕情：夕暮れの寂しい気持ち、あるいは夕方という情景。○斂：収め集める。あるいは収束する。そうであれば「夕暮れ時の寂しい気持ちが収まった」の意になる。○憶：追憶する。あるいは今思う。そうであれば、「あなたと一緒にここに留まりたいと思う」の意になる。○淹留：久しく留まる。○復増今日歎：潘岳の「哀永逝文」(「文選」卷五十七)に「憶舊歡兮増新悲」とある。○分慮：思慮がばらばらになる。○悲端：秋のこと。「楚辞」九弁(一)に「悲哉、秋之爲氣也」とある。○剡：会稽郡治下の町。現在の嵯県。○天姥山：天台山の西北にある山。李白もここに登り、いくつかの詩を残している(加藤国安「李白の天台山・天姥山の詩」)。○浮丘公：古の仙人。王子喬を連れて鶴に乗って嵩山に登ったといわれる(「列仙伝」)。「天台山記」にも登場し、天台山にも棲んでいたという。

■口語訳

晩秋に、遠くの山(天姥山)を尋ねようとした。山は遠くにあり中々近くにならない。

(送ってきた)あなたと山の片隅で別れようとしたが、それはできず、別れの辛さを抱いて長い道を二人で歩いた。

いよいよ川の中程で袂を分かとうとしたが、いざ行こうとして別れの情で耐えられなかった。

あなたを何度も振り返って見たが、首がまだ疲れないうちに、あなたの乗った船は渚の曲がり角で見えなくなってしまった。

汀に隠れてしまったのであなたの船を見ることはあきらめ、棹を急がせて急流に乗り込む。

友と過ごす楽しみを押さえ込むが、別離の悲しみを抱えたまままで千里の旅に出ることになる。

日が落ちて宿泊することになり、ともづなを川に臨む棲につないだ。旅の夕暮れの寂しさが集まってくるだけでなく、あなたと一緒に旅をした時のことが思われてならない。(其二)

あなたとともに長く逗留していた時の喜びを思うと、今の別れの嘆きがいやましになる。

この別れの悲しみは已に私の心を千々に乱れさせているが、まして今は秋という悲しみの季節でありなおさらだ。

秋の滝の音は北の谷川で鳴り続け、悲しげな猿の声は南の山に響いている。

別れたばかりの悲しい心は憂いに満ち、かつての思い出が湧き集まってくる。(其三)

集まりくる思い出は別れのつらさを掻き立てるが、朝には清らかな谷川の南を出発した。

夕べには剡中の宿に投宿し、明朝 天姥山に登った。

山はどこまでも高く雲や虹の中に入っていくようで、(そのすばらしさから)帰る時期はいつになるのか分からない。

もしも仙人の浮丘公に出会ったならば、(そのままここに留まること

になって) あなたからの見事な便りは再び受け取ることはないでしょう。(其四)

■解説

謝靈運(三八五〜四三三)の作品は、前集に賦一篇(「山居賦」と詩二篇、別編に詩が一篇収録されているほか、許本に「王子晉讚」を収める。ここでは、詩三篇と讚を扱い、賦は別稿で扱う。謝靈運については既に多くの研究がなされているので、詳細はそれらに譲る。校勘や語注も最小限に留めた。日本の訳注で参照したものは次の通り。

○内田泉之助・網祐次『文選(詩篇)上』(新釈漢文大系)一九五三(「新釈」と略)

○花房英樹『文選(詩騷編)三』(全釈漢文大系)集英社、一九七四(「全釈」と略)

○森野繁夫『謝康樂詩集』白帝社、一九九七(「森野」と略)

中国で出版された訳注も数多いが、本稿では次の一点をあげる。

○顧紹柏『謝靈運集校注』中州出版社、一九八七(「顧紹柏」と略)

この詩の脚韻は、平水韻で、近・隱が「吻上」、吟・忍が「軫上」。舟・流・遊・樓・留が「尤平」。歡・歎・端・巒・攢が「寒平」。心・陰・岑・尋・音が「侵平」。脚韻からも、四部構成であることが分かる。

小尾郊一氏は、始寧に退帰していた元嘉七年(四三〇)頃の作ではないかとされる。

「文選」で「贈答」に分類されているように、第一節から第三節までは、知人との別れの悲しみを述べるもので、そこが評価の対象と

なっている。小尾郊一氏は「最後に彼の俗世を超越したい考えの一端をものぞかせている」と述べられるが、この点はあまり大きな比重を占めているようには感じられない。

前集がこの詩を収録したのは、謝靈運が訪れたのが、天台山に隣接する天姥山であり、その山の幽遠さを詠っているからであろう。

⑦遊赤石進(二) 航海〔靈運游名山志曰、永寧安固二縣中路東南便是赤石〕 謝靈運

☆前集卷上

★文選卷二十二・初学記卷六・三謝詩・古詩紀卷四十七・先秦詩中宋詩卷二

◆題について

◇訓訳

赤石に遊び、進みて海に航す。〔靈運の游名山志に曰く、永寧・安固二縣の中路、東南は便ち是 赤石なり〕。

◇校勘

〈一〉文選・初学記作帆。

◇語注

○赤石：注にも引く、謝靈運の「游名山志」以外にその記録がない。それによれば、永寧縣の東南にあった山の名。○航海：文選は帆海とする。新釈は「海に帆す」と訓ずるが、海に帆を浮かべるの意にならう。顧紹柏は、海の名であるとする。「光緒永嘉縣志」卷二に「帆海山」があり、

かつては海だったところが陸地化し、昔の海の名が山の名となったことを引く。日本に伝来する九条本文選では「汎海」とあることから、全釈や森野はそれに従い、「海に汎ぶ」と訓ずる。○永寧：永嘉郡内の町。今の温州市。○安固：今の瑞安県。○中路：道の半ば、途中。永寧から安固へ至る道の途中ということか。

◇口語訳

赤石山に遊び、更に進んで海で航海する。「謝靈運の「游名山志」に「永寧県と安固県の間、東南の辺りが、赤石である」という。」

■本文と訓訳

| | |
|-------|---------------|
| 首夏猶清和 | 首夏 猶ほ清和にして |
| 芳草亦未歇 | 芳草も亦 未だ歇きざす |
| 水宿淹晨暮 | 水宿して晨と暮とを淹しくし |
| 陰霞屢興没 | 陰霞は屢興没す |
| 周覽倦瀛壖 | 周く覽めて瀛壖に倦み |
| 况乃凌窮髮 | 況や乃ち窮髮を凌ぐをや |
| 川后時安流 | 川后は時に流れを安らかにし |
| 天呉靜不發 | 天呉は靜にして發せず |
| 揚帆采石華 | 帆を揚げて石華を采り |
| 挂席拾海月 | 席を掛けて海月を拾う |
| 溟漲無端倪 | 溟漲は端倪無きも |
| 虚舟有超越 | 虚舟は超越すること有り |
| 仲連輕齊組 | 仲連は齊組を輕んじ |
| 子牟眷魏闕 | 子牟は魏闕を眷る |

| | |
|-------|--------------|
| 矜名道不足 | 名に矜れば道に足らず |
| 適己物可忽 | 己に適へば物も忽るべし |
| 請附任公言 | 請ふ任公の言に付き |
| 終然謝天伐 | 終然 天伐を謝せんことを |

■校勘

〈二〉李善注文選・初学記・古詩紀作陵。〈三〉先秦詩作掛。〈四〉初学記作明。〈五〉李善注文選・初学記・古詩紀作天。

■語注

○首夏：初夏四月。○清和：空氣が清らかな二月の氣候を言う語。○水宿：船に寝泊まりする。○陰霞：陰の霞。夕焼けのことを神話的に表現したものとする。○瀛壖：海岸。○凌窮髮：窮髮は北の果ての不毛の地。「莊子」逍遙遊篇にある。新釈は、今いる土地の事を指すとし、全釈と森野は、ここから更に遠くの地とする。今、後者で訳しておく。○川后：川、波の神。○天呉：水、海の神。○溟漲：海。○輕舟：荷物積まない空船。何者にもとられず自由自在であることの比喩となることもある。○仲連：戦国の人、魯仲連。功績により齊国より爵位を与えられようとしたが、海上に通れ、隠遁したという。齊組は、齊国発行の印綬。○子牟：魏の公子。「自らは江海のほとりに居るが、ここは魏闕の下にある」と述べたという。魏闕は魏の宮門。魏の朝廷を指す。○任公：太公任。「莊子」山木篇に、太公任の言葉として「真つ直ぐな木は有用なために若木の内に切られてしまふ」というものを載せる。

■口語訳

初夏であるのになお二月のような澄み切った陽気、春の香草もまだ
尽き果ててはいない。

船で寝泊まりして何日も過ぎ、陰の霞が何度も立ったり消えたりし
た。

海岸はあまねく見てもはや飽いた。まして更に遠い僻遠の
地へ行くなど考えられない。

時あたかも、川の神は流れを安らかにし、海の神は波を静めている。
そこで帆をあげて海草を採り、蓆を掲げて海月を採集に行く。

大海原は果てしが無く、小さい小舟なのでどこへでも行くことが出
来る。

かの魯仲連は斉国の仕官の薦めを退けて海上に隠遁したというし、
魏子牟は逆に海上にありながら、都のことを思い続けたという。

名誉を誇りとして執着すれば道に背くことになり、己の心のままに
すれば金銭などの物への執着もなくなるのだ。

あの任公の言に従って、早死にの運命から遁れて天寿を全うしたい
ものだ。

■解説

脚韻は、平水韻で、歎・没・髪・發・月・越・闕・忽・伐が、「月
入」。

永嘉太守時代の、景平元年（四二三）の作とされる。海を素材と
する詩文は中国では珍しい。海浜の遊びを詠いながら、世俗から抜
け出して心のままに生きる事を望む。場所やテーマは、天台山とは
関わりが無い。あるいは、天台山華頂峰が、「望海」と称されること

にちなんでの収録か。

⑧登永寧江望海 宋謝靈運

☆前集別編

★類從卷二十八・古詩紀卷四十七・先秦詩中宋詩卷二

■本文と訓訳

開春 獻初歳

開春 獻初歳

白日 出悠悠

白日 出でて悠悠たり

蕩志 將愉樂

志を蕩として將に愉樂せんとし

瞰海 始忘憂

海を瞰して始めて憂いを忘る

策馬 步蘭臯

馬に策ちて蘭臯を歩み

控縹 息椒丘

縹を控えて椒丘に息う

採蕙 遵大浦

蕙を採らんとして大浦に遵い

攀 苔履長洲

苔を攀かんとして長洲を履む

白華 綯陽林

白き華は陽林に綯をなし

紫 薔 玄春流

紫の薔は春流を玄くす

非徒 不弭忘

徒に弭み忘れざるのみに非ず

覽物 情彌適

物を覽て情は彌適る

萱蘇 始無慰

萱蘇 始めより慰むる無く

寂寞 終可求

寂寞こそ終に求むべきものなり

■校勘

* 題名、類從作東山望海詩、古詩紀作郡東山望溟海。 (一) 類從作庶。

(二) 前集作縹縹、類從・古詩紀作縹縹。依森野改控縹。 (三) 類從作

薄。〔四〕類従作若。〔五〕先秦詩作皜。〔六〕古詩紀云一作翹。〔七〕類従作曄。

■語注

○開春、獻歲、初歲：いずれも新年の年頭の意。○始：芸文類従は庶に作る。そうであれば、「憂いを忘れることを願う」の意。○椒：香草。○蕙荝：いずれも香草。○浦：岸辺。芸文類従は薄に作る。そうであれば、草原の意。○陽林：南向きの林。○馨：香草。○玄：芸文類従は曄に作る。そうであれば、輝かすの意。○萱蘇：忘憂草。○寂寞：俗塵を超越した境地。

■口語訳

新春の歳の始め、太陽は悠々と昇っている。気持ちをやつたりとさせて楽しんでとうとし、海を見下ろしてそこで始めて憂いを忘れることが出来た。馬にむち打って蘭の咲く岡を進み、手綱を引いて椒の生えた丘で休憩する。蕙草を取ろうとして岸辺に沿って進み、荝草を摘みながら長く続く洲を歩く。

(見渡せば) 白い花が南向きの樹林に縞模様をなしており、紫の香草が春の川の流れに黒い影を落としている。(こうした光景を眺めていても) ただ、憂いを忘れられないだけではなく、物思いの情はますます高じてくる。憂いを忘れさせてくれるという萱蘇の草などはなから期待すべきではなく、ただ世俗を超えた清浄な境地をこそとめなければなら

ないのだ。

■解説

脚韻は、平水韻では、悠・憂・丘・洲・流・適・求が「尤平」。この詩も永嘉太守時代の、景平元年(四二三)春の作とされる。海を眺め、また海浜を散策して物思いにふけり、最終的には世俗のあり方を脱却した清浄の境地こそ目指すべきものだとする。内容的に⑦と通じるものがあるが、天台山と直接の関係は見いだしがたいため収録したものか。

⑨王子晉讚 謝靈運

☆許本卷九

★初学記卷二十三・古詩紀卷四十八・全宋文卷三十三

■本文と訓訳

| | |
|-------|-----------------------------------|
| 淑質非不麗 | 淑質は麗ならざるに非ず |
| 難以之百年 | 以て百年に之 <small>か</small> んとするを難しとす |
| 儲宮非不貴 | 儲宮は貴からざるに非ず |
| 豈若登雲天 | 豈に雲天に登るに若かんや |
| 王子愛清淨 | 王子 清淨を愛す |
| 區中寔囂誼 | 區中 寔 <small>まこと</small> に囂誼たり |
| 冀見浮丘公 | 冀はくは浮丘公に見え |
| 與爾共續翻 | 爾と共に續翻たらん |

■校勘

*初学記を底本とする。(一)許本作涉。

■語注

○淑質：善良な性根。善美な天性。○儲宮：皇太子。○區中：限られた場所。転じて、世俗の世。○囂諠：かまびすしい。○續翻：乱れ飛ぶ様子。

■口語訳

その優れた素質が麗しくないのではない、ただ百年という長い寿命に至ることが難しいのだ。

皇太子という身分が高貴でないわけではない、しかし雲の上の御殿に登るのには及ばない。

王子喬は清浄を愛していて、このがやがやとした世俗世界を厭うた。願うことは浮丘公に出会い、ともに天空へ飛んでいくことだ。

■解説

脚韻は、平水韻で、年・天が「先平」、諠・翻が「元平」。讀であるが押韻しているようである。

前集未収。許本に載せるので収録した。

詩紀に「賛例不録。以其近五言詩、附存之」と注す。顧紹柏は、「衡山岩下見一翁四五少年讚」と同じ時期のものだろうとし、始寧への隱遁時期(景平元年(四二三)―元嘉三年(四二六))の作だろうとする。

⑩王子喬讚 江淹

☆許本卷九

★江文通集卷第十(四部叢刊・明胡之驥「江文通集彙注」(中華書局)・類從卷七十八・全梁文卷三十九)

■本文と訓訳

| | |
|-------------------------|--------------|
| 子喬好輕舉 | 子喬は輕舉を好み |
| 不待煉銀丹 | 銀丹を煉るを待たず |
| 控鶴 <small>レ</small> 去窈窕 | 鶴を控えて窈窕に去る |
| 學鳳對嘖嘖 | 鳳に學びて嘖嘖に對す |
| 山無一春草 | 山に一の春草無きも |
| 谷有千年蘭 | 谷に千年の蘭有り |
| 雲衣不躑躅 | 雲衣して躑躅せず |
| 龍駕何時還 | 龍駕して何れの時にか還る |

■校勘

*江文通集を底本とする。(一)類從・許本作上。

■語注

○輕舉：軽やかに高いところへ上がる。神仙や仙人が空を飛翔する様をかく表現する事が多い。或いは昇仙すること。○銀丹：金丹と同じか。仙薬のこと。○控鶴：控は馬などを乗りこなすこと。ここでは鶴に乗ること。○窈窕：奥ゆかしい様も指すが、ここでは奥深い様、深遠な様の意だろう。許本は「藍天」のことだという。一解であろう。芸文・許本によれば「天に上る」となる。○嘖嘖：高くそばだった山。○雲衣：雲

気。「楚辞」九歎に「服雲衣之披披」とあり、王逸は「被服雲氣」と注す。
○龍駕：龍に駕する。ここでは昇仙することをいうのであろう。

■口語訳

王子喬は昇仙を好み、

地上で銀丹が錬成されるのを待たずに昇った。

鶴に乗って奥深く深遠な天に昇り、

鳳凰にならって高くそばだった山々に向かい合う。

山には一本の春の草も無いが、

谷には千年も前から生えている蘭がある。

雲気を身にまとってためらうことはない、

天に昇っていつ帰ってくるかは分からない。

■解説

脚韻は、平水韻で、丹・岫・蘭が「寒平」、還が「刪平」。讚であるが押韻しているようである。

江淹（四四四～五〇五）は、梁の考城（河南省）の人。字は文通。齊・梁・陳に仕える。詩賦に長じ、また史書もものした。「齊史」があつたというが伝わらない。「隋書経籍志」に「梁金紫光禄大夫江淹集九卷（梁二十卷）」とあるが、現存する「江文通集十卷」本は輯本である。「梁書」巻十四、「南史」巻五十九本伝。

前集未収。許本が載せるので収録した。「雲山讚四首并序」の一つめの讚として「王太子」の題で収録され、他の三者は、陰長生・白雲・秦女である。序は「壁上有雜画、皆作山水好勢、仙者五六、雲氣生焉。悵然会意、題為小讚云」とある。これによれば、壁に書か

れた神仙の絵画を見て、作られた文ということになる。
五・六句目の対句が何を表すのか、よく分からない。

⑪桐栢曲 梁武帝

☆許本卷一

★樂府卷五十一・古詩紀卷六十四・先秦詩中梁詩卷一

■本文と訓訳

桐栢眞、昇帝賓。

桐栢眞 帝の賓に昇る

戲伊谷、遊洛濱。

伊谷に戯れ、洛濱に遊ぶ

參差列鳳管、

參差たり鳳管を列し

容與起梁塵。

容與として梁塵を起こす

望不可至、

望むらくは至るべからざること

徘徊謝時人。

徘徊して時人に謝す

■校勘

*樂府を底本とする。 (一) 古詩紀作筩。

■語注

○桐栢眞：桐栢真人。王喬の異称。○伊谷：谷は、溪谷あるいは溪流。伊水を指しているとしていいだろう。次の洛水とあわせ、王喬が伊洛の

地で遊んでいて浮丘公とともに、嵩山に登ったことを踏まえる。○參差：長短不揃いな様子。あるいは笙のような長さのことなる複数の管からなる樂器。ここでは、王喬が笙の名手であつたとされることから、管樂器の形容であろう。○鳳管：王喬の笙の演奏は鳳凰の鳴く声のよう

あつたという。○容與…ゆつたりのびのびした様。○梁塵…梁の上の塵。「梁塵飛」「動梁塵」などの表現があり、その音楽があまりに絶妙なため梁の上の塵も動いたという故事に基づく。

■口語訳

桐栢真人は、天帝の賓客の地位に昇られる。

伊水の谷川や洛水のほとりで遊歴した。

長短不揃いの笙で鳳凰の声を吹き鳴らせば、ゆつたりと流れて梁の塵も動かさんばかり。

彼は人々が自分の近くへ来ることは望まない、ぶらぶらと歩き回って人々に別れを告げた。

■解説

脚韻は、平水韻で、眞・賓・濱・塵・人が「真平」。

前集未収。許本が載せるので収録した。許本では「咏王喬」と題す。楽府詩集では、「清商曲辞」の中の「上雲楽」七曲のひとつとしてあげる。また「古今楽録曰」として「桐栢曲。和云、可憐真人遊」とする。

梁の武帝（四六四～五四九、即位は五〇二）は、姓名は蕭衍、字は叔達。齊の臣であつたが自立して梁を立てる。文学にも通じ、經典の注釈書など多数の著述があつた。その治世は五十年あまりに及び、その平和な治世を通して南朝文化が花開いた。しかし治世の後半は仏教に深く傾倒し、また政治が放恣になつて乱れ、侯景の乱のさなかに憂死した。「梁書」卷三に本紀。「隋書経籍志」に「梁武帝集二十六卷」を載せるが、伝わらない。

本詩は、王喬の昇仙を詠つたもの。

⑫ 錢臨海太守劉孝儀蜀太守劉孝勝 梁簡文帝

☆前集別編

★類從卷二十九・文苑卷二百六十六・古詩紀卷六十八・先秦詩下

梁詩卷二十一

■本文と訓訳

| | |
|-------|---------------|
| 碣石臨東海 | 碣石は東海に臨み |
| 峨嵋距西候 | 峨嵋は西候を距つ |
| 兩杜昔夾河 | 兩杜は昔 河を夾み |
| 二龍今出守 | 二龍は今 出でて守たり |
| 方無夜犬驚 | 方に夜 犬の驚く無く |
| 向息神牛鬪 | 向には神牛の鬪するを息む |
| 涼風繞輕幕 | 涼風 輕幕に繞む |
| 麥雨交新溜 | 麥雨 新溜に交わる |
| 念此一銜觴 | 此を念ひ 一たび觴を銜み |
| 懷離在惟舊 | 離を懷ふは 舊を惟ふに在り |

■校勘

（一）文苑作昔。 （二）古詩紀・先秦詩作邊。 （三）古詩紀作恩。

■語注

○碣石…山の名で、その所在地には諸説ある。戦国時代に燕の昭王が鄒行ら諸子の為に作らせた「碣石宮」という宮殿があつたという伝承によ

るもので、実在の山というよりは、伝説上の神山とすべきだろう。それが後世、河北省沿海の実在の山の名として用いられた（崑崙山などと同様）。ここでは劉孝儀の赴任地が東海に臨んでいることにことよせて登場させているのであろう。○峨嵋：四川省の名山。○西候：秋の季節をも言うが、ここでは、候に亭の意味があるので、西の辺境にある亭

駅とするのがよからう。○兩杜昔夾河：前漢武帝期の酷吏の杜周二人の子があり、彼の全盛期には、黄河の兩岸で郡太守となったとある（「家兩子、夾河爲守」・「史記」酷吏列伝）。しかし彼らは確かに勢力を奮ったわけだが、「其治暴酷」（同）とあり、決して好ましい存在ではなかった。あるいは別の典故かもしれない。○二龍：劉孝儀・孝勝兄弟を指す。

○守：音韻からしても、太守のこと。○夜犬驚：夜を守る犬が不審なものに驚いて吠えることか。「陳書」先主本紀に、徐陵の「冊陳公九錫文」を引き、陳公の功績を讀える中で「列郡無犬吠之驚、叢祠罷狐鳴之盜」とある。○神牛：「博物志」（増訂漢魏叢書）所収）卷三異獸に「九真有神牛、乃生谿上。黒出時共鬪即海沸、黄或出鬪岸上。家牛皆怖。人或遮則霹靂。号曰神牛」とある。○麥雨：麥の熟する頃に降る雨。○新溜：雪解けの急流。

■口語訳

孝儀君の行く碣石は遙か遠くの東海に臨んでいるといい、孝勝君の向かう峨嵋山は西の辺境の亭から更に隔たっているという。昔 杜周二人の息子は、黄河の兩岸の街の太守となったというが、今 二人のすばらしい人材は、ともに都を出て外地で太守となる。二人の任地では、これから夜に犬が驚いて吠えることもなくなるだろうし、

先には神牛が鬪うのもやめさせた。

涼やかな風が軽やかなカーテンにまとわりつき、
麦雨が流れの早い雪解け水に混じっていく。

このこと（別れ）を思ってはひとたび杯をあける、
別れを思うことは、かつての交友を思うことなのだ。

■解説

脚韻は、平水韻で、候・守・鬪・溜・舊が「宥去」。

梁の簡文帝（五〇三〜五五一、即位は五五〇）。姓名は蕭綱、字は世績。武帝の第三子。昭明太子の後を継いで太子となった。侯景の乱のさなか、武帝の憂死の後を受けて即位したが、やがて廃され、幽殺された。自身も宮体と称せられる優艶な詩をよくしたが、武帝時代の宮廷詩人のパトロンの存在でもあった。「梁書」卷四に本紀。「隋書經籍志」に「梁簡文帝集八十五卷」を載せるが伝わらない。

本詩は、題辞によれば、劉孝儀が臨海郡の太守として、劉孝勝が蜀の太守としてそれぞれ赴任するにあたっての送別の詩である。劉孝儀（四八四〜五五〇）は、劉孝綽の弟で名は潛、孝儀は字。梁に仕え太子時代の簡文帝の守り役も勤めた。大同十年（五四四）に、伏波將軍として、臨海郡（今の浙江省台州の地）太守に任じられている。「梁書」卷四十一に本伝。「隋書經籍志」に「梁都官尚書劉孝儀集二十卷」を載せるが伝わらない。劉孝勝は、孝儀の弟。兄同様諸官を歴任し、安西武陵王の長史として蜀郡太守に任せられる。後、侯景の乱に際し、武陵王が帝号を僭称し、孝勝を任用したことから、罪を問われたが後に許され復官している。

五・六句の意味するところはよく分からない。二人の新任太守の

徳により、治安が保たれ、神霊も鎮まるということであろうか。

劉孝儀の任地が臨海郡で、そこが海から天台山に向かう入り口にあたるなど天台山に関わりの深いところであったからの採用か。

⑬ 別王謙 吳均

★前集別編

☆類從卷二十九・文苑卷二百六十六・古詩紀卷八十二・先秦詩中
梁詩卷十一

■本文と訓詁

嚴光不^(一)逐世

嚴光は世を逐わず

流轉任飛蓬

流轉して飛蓬に任す

欲還天台嶺

天台の嶺に還らんと欲す

不狎甘泉宮

甘泉の宮に狎^ひれざるなり

離歌玉^(二)絃絶

離れの歌に、玉絃絶え

別酒金卮空

別れの酒は、金卮空し

儻遺故人念

儻^もし故人の念いを遺すならば

僕在東山東

僕は東山の東に在り

■校勘

(一) 前集作遂。依文苑・先秦詩改遂。(二) 前集作玄。依芸文等改絃。

■語注

○嚴光：後漢の人。若い頃光武帝と交わっていたが、その即位後は出仕せず山林に隠れた。隱遁者の草分け的存在。○甘泉宮：もとは秦の離宮

で、漢の武帝が増築した。ここでは、都(出仕)の象徴だろう。○離歌：別れの歌。○玉絃：玉のように美しく優美な音楽ということか。○金卮：黄金の杯。

■口語訳

あの隱者の嚴光は世俗の評判を追い求めず、
風にまかせて流轉の生涯を送った。

天台の嶺に帰ろうとしたのは、

都での宮仕えにがいやになったからだ。

(彼にならって私も隱遁するのだが)

別離の歌を歌っていたが、もはやそのすばらしい音曲も絶えてしま
い、

酌み交わしていた別れの杯も、もう空っぽになってしまった(別れ
の時が来た)。

もし君が、友人への思いを抱いてくれるならば、
私はあの東の山の、更に東に在ることを憶えていてほしい。

■解説

脚韻は、平水韻で、蓬・宮・空・東が「東平」。

吳均(四六九～五二〇)は、梁の吳興(浙江省)の人。字は叔庠。梁に仕え史書の編纂などにも携わった。「隋書經籍志」には「齊春秋三十卷」「梁奉朝請吳均集二十卷」等載せるがいずれも伝わらない。梁書卷四十五文学伝本伝。別れる相手の王謙は不詳。送別か留別かも不明だが、ここは留別の詩と取り、吳均が都を離れて隱遁しようとしてる場面として解した。

この詩で呉均は、巖光が天台山に還ったとするが、この話は他の資料には見えない。

苑作夏簧三山響。云、一作三舌響。古詩紀云、一作夏笛三山響。

⑭道士步虚詞 庾信

☆前集別編

★庾子山集卷二（四部叢刊所収、清倪璠注・近人許逸民校点『庾子山集注』中華書局、一九八〇）・類從卷七十八・文苑卷一百九十三・樂府卷七十八・古詩紀卷一一四・先秦詩下北周卷二

■本文と訓詁

| | | |
|---|-----|-------------------------|
| 歸心遊太極 | 歸心 | 太極に遊び |
| 迴向入無名 | 迴向 | 無名に入る |
| 五香芬紫府 | 五香 | 紫府に芬り <small>かほ</small> |
| 千燈照赤城 | 千燈 | 赤城を照らす |
| 鳳林採 <small>採</small> 珠寶 <small>珠寶</small> | 鳳林 | 珠寶を採り |
| 龍山種玉榮 <small>玉榮</small> | 龍山 | 玉榮を種 <small>つ</small> う |
| 夏簧三舌響 <small>舌響</small> | 夏の簧 | は三舌 響き |
| 春鐘九乳鳴 | 春の鐘 | は九乳 鳴る |
| 絳河應遠別 | 絳河 | 應に遠く別るべし |
| 黃鵠來相迎 | 黃鵠 | 來りて相迎ふ |

■校勘

〈一〉樂府作回。〈二〉前集作桐。依文苑・先秦詩、改珠。〈三〉前集・文苑作春。類從・樂府作春。文苑云、一作龍。古詩紀作龍、云一作春。先秦詩作龍。依文苑一說・古詩紀、改龍。〈四〉樂府作夏笛三山響。文

■語注

○迴向：回向に同じ。心をひとつに向けること。○無名：「老子」第一章に「無名、天地之始。有名、万物之母」。○珠寶：真珠、あるいはそれに類する木の実。いずれにせよ仙界において、鳳凰が食するものとしてのイメージが湧く。後句の「玉榮」とも対をなす。前集は「桐実」とするが、桐の実が仙界に関わるという話は聞かない。○龍山：前集は「春山」に作る。「穆天子伝」卷二に、崑崙山周辺の山として「季夏丁卯、天子北升于春山之上、以望四野曰、春山、是惟天下之高山也」等の記事がある。白の形をした山というくらいの意味であろう。ここでは前句の「鳳林」との対も考え、古詩紀等に従って「龍山」とした。龍の棲む山、ということになる。○玉榮：玉の花。○簧：笙の類の笛、あるいはそれに使用されている舌（リード）。後句の「鐘」と対をなす。○九乳：乳は鐘につけられた乳首状の突起物。乳が九つある鐘。○絳河：銀河。○黃鵠：「說文解字」に「鵠、黃鵠也」とあり、段玉裁は「黃、各本作鴻。依玄應書李善西都賦注、正」と注す。

■口語訳

私の心が帰するところは、万物の根源である「太極」であり、私の心が一心に向かうところは、天地の始めである「無名」である。紫府（仙界の建物）には五種類の神秘的な香りが漂い、幾千もの灯火が赤城山を照らしている。鳳凰の棲む林で珠の実を採集し、龍の棲む山には玉榮を植える。

夏には三舌の簧を響かせ、
春には九乳の鐘を打ち鳴らす。
やがて銀河を遠く離れなければならなくなったが、
黄鵠が迎えに来てくれた。

■解説

脚韻は、平水韻で、名・城・榮・鳴・迎が「庚平」。

庾信（五一三～五八一）、北周の南陽（河南省）の人。字は子山、梁に仕え、後に北周に仕え開府儀同三司にいたり、庾開府とも称せらる。艶麗な詩を得意とし、徐陵と並び徐庾体の称がある。周書卷四十一・北史卷八十三本伝。「隋書経籍志」には「後周開府儀同庾信集二十一卷」を載せるが、今「庾子山集十六卷」が残る（四部叢刊）。

本詩は、道士歩虚詞十首のひとつ。歩虚詞は、唐呉兢「樂府解題」に「歩虚詞、道家曲也。備言衆仙縹緲輕舉之美（歩虚詞は、道教関係の歌曲であり、諸もろの神仙たちがふわふわと空中を飛行するすばらしいさまをのべたもの）」とある。元々十作品セットで、道教儀礼の中で歌われる、極めて宗教的色彩の強いものだったとされる⁴。東晋の陸修静あたりを嚆矢とし、隋煬帝や唐劉禹錫などの作品もあり、唐代頃まで作られた。庾信の作品は、陸の本旨を受け継ぎつつも、遊仙詩の流れを受けた文学的要素が強いものに変質しており、加藤国安氏⁵や森野繁夫氏⁶らは、北周武帝時代の道教隆盛を背景に、王侯達を讀者として作られたものであろうとする。日本語の訳注に、加藤氏と森野氏のものがあり、本稿ではそれらを参照した。

本詩は、十首の連作の七番目にあたり、仙界の様子を画いたもの。

前集がこの詩を取り上げたのは、四句目の「赤城」という言葉に注目してのことであろうが、この場合は仙界の山のことと、必ずしも天台山の赤城山を意味しているわけでは無からう。

なお、庾信の父である庾肩悟を、「天台山方外志」卷十は「隱士」の一人と数え、天台に隱居したという。それは庾信の「哀江南賦」に「天台逸民」と題するからだというが、当該部分は現行本の集では「天山逸民」となっており、彼と天台山とを結びつけるものとはなっていない。

⑮詠山 劉斌

☆許本卷一

★初学記卷五総載山・古詩紀卷一二六・先秦詩下隋詩卷六

■本文と訓訳

| | |
|---------|-------------------------|
| ① 靈山峙千仞 | 靈山は千仞に峙 ^{そび} え |
| ② 蔽日且嵯峨 | 日を蔽ひ且つ嵯峨たり |
| ③ 紫蓋雲陰遠 | 紫蓋に雲陰 遠く |
| ④ 香爐烟氣多 | 香爐に烟氣 多し |
| ⑤ 石梁高鳥路 | 石梁は鳥路より高く |
| ⑥ 瀑水近天河 | 瀑水は天河に近し |
| ⑦ 欲知聞道里 | 道里を知聞せんと欲し |
| ⑧ 別自有仙歌 | 別に自ら仙歌有り |

■校勘

*初学記を底本とする。題名許本作詠天台山。〈二〉初学記作雪。従古

詩紀改竄。 〓 許本作陽。

■語注

○蔽日：日光を遮蔽すること。「楚辭・九章・涉江」に「山峻高以蔽日兮」とある。 ○嵯峨：高く突つ立って険しい様。 ○紫蓋：紫色の車の屋根。帝王のみが用いる。よって許本は都の象徴と見る。あるいは雲気が山にかかった様を言う。そこから転じて山の名前にも屢々用いられる。 ○雲陰：許本は雲陽とし、秦代の都近くの県だとし、紫蓋同様都の象徴とし、この句を天台山が都から遠く離れていることを表現しているとするが、従い難い。雲陰で、雲のかげ、陰った雲。あるいは雲が陰ること。 ○香爐：その姿からしばしば山の名として用いられる。ここでは固有名詞ではなく、香爐のような険しい山の姿を表している。 ○烟氣：けむる気。 ○石梁：石造りの橋。孫綽「遊天台山賦」で山中の自然の石橋をかく表現したところから、天台山を象徴する景物となっている。しかし、天台山以外の山においても、石梁と呼ばれるものは多数ある。 ○瀑水：滝。やはり孫綽「遊天台山賦」に瀑布の表現がある。その意味で、石梁と瀑布は天台山を象徴するものと見ることが出来る。その一方霊山と呼ばれるような山であれば、この両者が揃っていることも珍しくはなく、この詩が天台山を意識しているものとするにはややためらいがある。 ○知聞：知る。告げる。あるいは「聞」を「知」とよみ ○道里：道と村里。あるいは道のり、道程。 ○仙歌：仙人の歌う歌のことか。

■口語訳

霊妙な山は千仞もの高さにそぼだち、

太陽を蔽わんばかりに険しく聳えている。

紫蓋のような山に陰った雲がかかり、

香炉のような山頂は煙る雲気を多くまとっている。

山中の石橋は鳥達の通り道よりも高いところにある、

瀑布の水は天川にも近づかんばかり。

そんな山中で道程を知るために人に尋ねようとしたら、

自然と仙人の歌が聞こえてきた。

■解説

脚韻は、平水韻で、峨・多・河・歌が「歌平」。

前集未収。許本が載せるので収録した。初学記等の題名は「詠山詩」で天台山との関わりを示唆しない。許本は天台山を詠んだ歌とするが、必ずしも確証はない。詩に「石梁」「瀑水」などの語句が登場する点は、天台山との関わりが感じられるが、これらの語句は他の山においても使用されるものである。

劉斌（生卒年不詳）は、南陽（河南省）の人。文章に優れ、隋末唐初の混乱期には、竇建徳・劉黑闥らに仕えた。劉黑闥が李世民に打ち破られて突厥に逃げたのに従い、北地に渡り、その後の消息は分からない。「隋志」巻七十六・「北史」巻八十三本伝。「先秦詩」は、本詩の他に三篇を収録している。

この詩は一種の遊仙詩であろう。語注でも指摘したが、天台山に関わりの深い「石梁」「瀑水」が登場することから、天台山を意識した作品とも取れるが、必ずしも確証は持てない。

①⑥登台山篇 李巨仁

☆前集卷上、許本卷一

★以下の諸書は「登山山篇」と題し、初句を「名山稱地鎮」とし
たものを収録。

文苑卷二百十一・樂府卷六十四・古詩紀卷一百二十七・先秦詩
下隋詩卷七

■本文と訓詁

(一) 台山 稱地鎮

台山は地鎮と稱す

(二) 千仞上凌霄

千仞の上に霄を凌ぐ

(三) 雲開金闕迴

雲は開き金闕に迴り

霧起石梁遙

霧は起ちて石梁 遙かなり

翠微橫鳥路

翠微 鳥路に横たわり

(四) 珠澗入星橋

珠澗 星橋に入る

風急青谿晚

風は急なり青谿の晚

霞起赤城朝

霞は起る赤城の朝

寓目幽棲地

寓目す幽棲地

駕言追綺季

駕言して綺季を追ふ

避世桃源士

世を避くるは桃源の士

忘情漆園吏

情を忘るるは漆園の吏

抽簪傲九辟

簪を抽きて九辟に傲り

脱屣輕千駟

屣を脱ぎて千駟を輕んず

沈冥負俗心

沈冥にして俗心に負おぼき

蕭灑凌雲意

蕭灑として雲意を凌ぐ

蒼蒼聳極天

蒼蒼として極天に聳え

伏眺^(十四)盡山川 伏して眺むれば山川を盡くす

疊峰如積浪 疊峰は積浪の如く

分崖若斷煙 分崖は斷煙の若し

淺深聞度雨 淺深 度雨を聞き

輕重聽飛泉 輕重 飛泉を聴く

采藥逢三島 藥を采りて三島に逢ひ

尋眞^(十五)值九仙 眞を尋ねて九仙に值ふ

藏書凡幾代 書を藏して凡そ幾代

看博已經年 博きを見て已に年を経る

逝將追羽客 逝きて將に羽客を追はんとするに

千載一來旋 千載に一たび來旋するなり

■校勘

*題名を、天台前集は「登山山篇」とし、文苑らの諸書は「登山山篇」とする。

(一) 文苑・樂府・古詩紀作名山。(二) 樂府作本鎮地。文苑

云、一作本鎮地。(三) 樂府作追遞。文苑云、一作追遞。(四) 樂府作

雲披金澗近。文苑云、一作雲披金澗近。(五) 樂府作珠樹拂。文苑云、

一作珠樹拂。(六) 樂府作清。文苑作散。(八) 樂府作客。文苑云、

一作客。(九) 樂府空格。(十) 樂府作尋。文苑云、一作尋。(十一)

樂府作跡絕。(十二) 樂府無以下二句。(十三) 樂府作疎策。文苑云、

一作疎策。(十四) 文苑作疊。(十五) 樂府作斜。文苑云、一作斜。(十

六) 樂府作遇。文苑云、一作遇。(十七) 樂府作傳。文苑作博。

■語注

○台山：天台山を指すか。しかし前集以外の諸書は、すべて「名山」と

する。そうであれば、天台山に関わず、名山全般の話ということになる。

○称地鎮：熟語ではない。「地」の「鎮め」と「称される」いうことか。

楽府等が「本鎮地」に作るのに従えば、元々地を鎮めるものであった、
くらしいの意になろう。○千仞：楽府等が「迢遞」に作るのに従えば、遙

かに高いの意。○金闕：天帝や神仙の住まう宮殿。○翠微：山、又は山

の八合目辺り。山気で薄緑色にかすんでいることから言う。○珠潤：あ

まり熟していない。真珠のような美しい水滴が流れる川、くらしいの意味

か。楽府等が「珠樹攄」に作るのに従えば、仙木が星橋に触れる、くら

いの意味になろう。○星橋：銀河に掛かる橋。○霞起：楽府等が「霞

散」に作るのに従えば、朝になると霞が散って赤城山が姿を表す、の意

味になろう。○寓目：注目して見る。○駕言：出遊すること。言は語

助詞。「詩経・邶風・泉水」に「駕言出遊、以写我憂」に基づく。○綺

季：綺里季。秦末漢初の隠者で、四皓の一人。○漆園吏：荘子が勤めて

いたとされる。○脱履：草履を脱ぎ捨てる。惜しげもなく捨て去ること

○九辟：辟は召されて任官すること。繰り返して召されること。○千駟：

馬四千頭、あるいは車千乗。貴顕の象徴であろう。○沈冥：深い静寂。

○蕭灑：さっぱりとして清らかな様。○極天：天空の極み。○斷煙：

ちぎれちぎれの煙。○淺深：浅いと深い、あるいはそれを測る。○度雨

：不詳。庾肩吾「尋周處士弘讓詩」〔庾度支集〕：「漢魏六朝百三集」

所収〕に「泉飛疑度雨、雲積似重樓」とある。雨かと疑う、の意味か。

○飛泉：滝。○三島：神仙の住むという東海中の三神山。蓬萊・方丈・

瀛洲。○九仙：九種の仙人。諸説あるが、諸仙という意味かもしれない。

○看博：不詳。幅広く色々なものを見聞きしてきたという意味か。

■口語訳

天台山は、地の鎮めとして称揚されている。

千仞にも聳え青空をも凌ぐ高さである。

雲が開けると山頂の神仙の宮殿にまわりつき、

霧が起こって自然にできた石の橋を遙かに霞ませる。

山の頂上付近には鳥の通り道があり、

山中の美しく清らかな川の水は、銀河に掛かる橋をくぐって流れる。

青々とした谷の夕べには風が吹き、

朝には赤城山で霞が起こっている。

（私は）俗世を離れて静かに隠棲できる場所に目をつけ、

出遊して、隠遁した綺季の跡を追いかける。

陶淵明「桃花源記」の世界の人々のように世を避け、

莊周のように世俗の情を忘れてしまおう。

簪を抜いて正装をやめ、繰り返し出される招請状も無視して、

名誉や富貴、王侯の地位も惜しげもなく捨て去ろう。

深い静寂の中に沈んで世俗の連中の期待に背き、

さっぱりと清らかにして雲の意志よりもこだわりがない。

青々として天の際まで聳えており、

そこから伏して見れば山川を眺め尽くせる。

重なる峰々は積み重なった波のよう、

切れ切れの断崖はちぎれた煙のよう。

深かったり浅かったりする度雨の音が耳に入ってきた、

時には重く、時には軽く響く滝の音に耳を傾ける。

仙葉を採集しては東海の三神山まで至り、真人を尋ねては九仙に出会う。

書物を蔵してもう幾代にもなり、博く物事を観察して既に年を経た。

そこで仙人のあとを追おうとしたが、

仙人は千年に一度やってくるというわけで、それは果たせなかった。

■解説

脚韻は、平水韻で、霄・遙・橋・朝が「蕭平」、季・吏・駟・意が「寘去」、川・煙・泉・仙・年・旋が「先平」。

李巨仁について、「詩紀」は「爵里無考」とする。生卒年他、未詳。

先秦詩は本篇の他に、「釣竿篇」（初学記等）・「京洛篇」（文苑英華等）・「賦得方塘含白水篇」（初学記等）・「賦得鏡詩」（初学記等）を収録するが、伝記資料はない。

詩紀は「楽府失載名氏。在武帝後。詩彙作武帝時。誤也。考文苑英華作李巨仁」と注す。

脚韻から見れば、本詩は三つの部分に分かれる。第一部は天台山（名山）のすばらしさを画き、第二部で世俗から離れてそうした山に隠棲することを述べ、第三部では名山に入って神仙を求めたことを述べる。今回は、最終的にはそれが得られなかった、と解した。この詩も、天台前集のみが天台山とのつながりを指摘しているのみで、他の諸書は、一般的な名山の詩だとしている。

【注】

(1) 「天台前集」は、宋代に作られた天台山に関する詩のアンソロジー

であるが、その詳細は前稿参照。また前稿では、「天台前集」の序文と、六朝以前の詩を三点を検討した。次稿では、孫綽「遊天台山賦」と謝靈運「山居賦」の二つの賦、並びに逸文などを検討し、最後に全体を通じた考察を加える予定である。

前稿：「天台山の詩歌（其一）」六朝以前（上）「埼玉大学紀要 教育学部」第五十八巻第一号、二〇〇九

(2) 小尾郊一「謝靈運―孤独の山水詩人」汲古書院、一九八三

(3) 『楽府詩集』巻七十八、雜曲歌辭 所収。口語訳は、後掲の深澤氏による。

(4) 深澤一幸「歩虚詞」考（吉川忠夫『中国古道教史研究』同朋舎、一九九二）

(5) 加藤国安「越境する庾信（下）」研文出版、二〇〇四

(6) 森野繁夫「庾信の詩―道士歩虚詞十首―」『中国学論集』（安田女子大学中国文学研究会）第四十三号、二〇〇六

*前稿の補遺

「①茅初成昇天謠 秦時邑謠」について、これを掲載している資料が「史記・集解」以外に見つかったので紹介しておく。

【引用文】

○「三輔黄図」巻三 甘泉宮の項

「集靈宮・集仙宮・存仙殿・望仙臺・望仙觀、俱在華陰縣界、皆武帝宮觀名也。華山記及三輔舊事云、昔有太元真人茅盈内紀、始皇三十二年九月庚子、盈曾祖父濛、于華山、乘雲駕龍、白日昇天。先是、邑人謠曰、『神仙得者茅初成、駕龍上昇入太清、時下玄洲戲赤城、繼世而往在我盈、帝若學之臘嘉平』」。

【解説】

「三輔黄図」は、長安の地誌であるが、撰者は不詳。晁公武は梁陳の間の作か、とするが、最終的な編集は唐代半ば以降だろうとされる（陳直『三輔黄図校正』陝西人民出版社、一九八〇、他）。ここに引用されている「華山記」は、撰者・成立年代とも不詳。陳振孫『直齋書録解題』に収録する（一巻、不知名氏）他、芸文類従などに断片が残る。六朝時代か唐初のものか。「三輔旧事」は、長安周辺の地誌や挿話を集めたもの。「新旧唐書」では、「韋氏撰」とするが、詳細は未詳。あるいは「隋書・経籍志」の「三輔故事」と同じか。「初学記」などに断片が引用されていることから、唐初までには成立していたものと思われる（「長安史蹟叢刊」所収）。いずれにせよ、唐初ころまでは下ることが考えられる資料に引用されており、「史記・集解」より古い資料であるとは言えないだろう。

（二〇〇九年三月三十一日提出）

（二〇〇九年四月一七日受理）